

ICT 活用による音楽技能向上の指導法に関する研究

A Study on Teaching Methods to Improve Musical Performance Skills Using ICT

杉山 祐子¹⁾ 岡田 泰子¹⁾
Sugiyama Yuko Okada Yasuko

抄録：音楽技能は個人差が大きく、学生の生演奏に対し指導者がその場で修正や指導をしていた。しかし、ICTを活用することで、オンライン授業であっても、教育内容の伝え方や学生の理解し易さを創意工夫することができた。しかしその過程で明らかになった課題は、「人前で演奏に慣れる」と「他者の演奏の理解ができる」ことの欠如であった。そこで、『ワークシート』による自己の演奏の振り返りと他者の演奏への気づきをメッセージとして言語化する取り組みを追加した。その結果、相手を読むことを意識した思いやりや励ましの言葉が多くなった。またその言葉を受け止めることで、自己肯定感も構築され、自主練習の積極的な取り組みが見られた。このように、オンライン授業であっても“学生同士の学び合い”が成立した。新型コロナウイルス終息後も、ICTを活用した授業が教育形式の1つとなり、他者と学び合い自ら気づく学習の方法の可能性は高いであろう。

キーワード：ICT、音楽技能、指導法、オンライン授業、学び合い

I. まえがき

2020年度、新型コロナウイルス感染拡大により、大学での授業は多大な影響を受けた。これまで当たり前としていた登校・対面での授業が不可能となったことから、急速なICTを活用した授業の対応を迫られた。音楽技能の授業では、「お稽古事」の慣習により指導者の目の前で1対1のレッスンが主流であり、リアルタイムの授業はまだ課題が多かった。先行研究では、授業ではなく自主学習における練習の効率化や演奏データの可視化に、ICTが活用されてきた。その中でも田中・小倉・鈴木・辻(2017)¹⁾は、ピアノ演奏状況をグラフに出力してフィードバックするプログラムを開発した。加えて、学習者が感想を記述する「ピアノ学習プロセス」を構築した。小澤(2019)²⁾も、ピアノ実技指導でのICT活用によるレッスンの効率化と独習の支援に取り組んだ。それまで紙の「振り返りのカード」をiPad上で学生とやり取りが書き込めるようにした。しかし学生自身の意識の変化は見られなかったことから「今後はICT活用による学生のピアノに対する意欲向上に向けた実践を行っていく。」と述べている。このように教師の授業効率にICT活用は効果的であったが、これまでの研究が授業ではなく自主学習における練習の効率化や演奏データの可視化のためのICT活用であり、教師と学生の1対1が対象であった。今後は複数の学生が存在するリアルタイムの授業での効果的な指導法にICTを活用する必要がある。

ICT化の機会として、2019年の新型コロナウイルス感染拡大がある。新型コロナウイルス感染拡大により、音楽技能習得の授業でのICT活用の試みがようやく進み始めたところである。松井典子(2021)³⁾は、新型コロナウイルス感染拡大の影響でピアノ実技授業をオンデマンド型オンライン授業で実施した。教材をオンデマンド型で配信し、学生からフィードバックする仕組みである。筆者らも2019年前期は音楽技能習得の授業で同様の仕組みを構築した。しかし、リアルタイムでの指導や交流ができないことから、分からないことがその場で解決できない欠点があ



図1 Zoomレッスン用のICT機材の活用

¹⁾ 中部学院大学短期大学部 幼児教育学科

り、学習意欲低下の学生が発生した。特にピアノ初心者は学習が相当困難であった。そこで、2020年度のピアノ指導の授業ではICTを活用し、Zoomによるオンライン授業を試みた(岡田・杉山,2020)⁴⁾。この時期、オンライン授業へ切り替える科目は多くあった。しかし、実技の指導は動作をどのように伝え教えるかが大きな課題となった。特に音楽技能習得の授業では、学生が観たい技能をパソコンの固定画面だけで伝えることは難しい。さらに、音楽のニュアンスを伝える音響が、パソコン等のスピーカーで聴き取らなくてはならない。このような機能的な課題に対し、ICT機器を多用し対面のレッスン同様の学びを担保するZoom授業を実施した(図1)。このように、指導者対学生の一人ひとりへの教育においては、Zoom授業でも成立するに至った(岡田・杉山,2020)⁵⁾。

このようなオンライン授業を1年間行った結果、明らかになった課題が2点あった。それは、①人前での演奏に慣れる、②他者の演奏の理解ができること、である。新型コロナウイルス以前は、対面授業やグループワーク、試験において、これらの課題を克服する機会があった。しかしオンライン授業では、自分の学びの空間には他者が居ない。そのため独りでの演奏に慣れてしまい、いざ人前で披露する場合の①の緊張感の克服が困難であった。同様に、授業中にディスカッションをして学習内容を共有することはできなかった。直接接することができなくても、学習内容を共有し、お互いに感想を交換するといった“学生同士の学び合い”により①や②の課題解決を目指すことが求められた。そこで音楽技能向上の指導法として、ICTを活用した“学生同士の学び合い”の構築について、実際の授業を詳しく調査する。

II. 調査方法

ピアノ技能習得の授業「音楽A」を15回行う中で、『ワークシート』を導入し、“学生同士の学び合い”の様子を調査する。また、15回の授業の終了後、振り返りのための質問紙調査を行う。回答は自由意志とする。

対象者：C短大保育者養成課程1年生84名。

期間：2020年9月22日から2021年2月2日。

手続き：

1) 授業形式

学生は、8名程度のグループに分けられ、1名の教師が90分内で全員の個別レッスンを行う。1名の学生は約10分間のレッスンとなる。

この授業は、毎週1回の全15回である。新型コロナウイルス感染防止のため、ハイブリット形式(対面とオンラインの交互)で実施された。オンライン授業はZoom形式とした。学生全員が終始担当教師のZoomに出席し、グループ全員のレッスンを聴講する。レッスンを受ける学生は、全員が聴講している中で演奏し、教師から指導を受けている。また、対面での授業では、三密防止の観点から、レッスン室に入室できる人数を学生3名と限定し、終了後退室し、新たに1名が入室するというローテーションとした。

2) 『ワークシート』の活用

これまでのオンライン授業が教師対学生の1対1に留まっていた指導法を、仲間と共有できるよう『ワークシート』を追加した。『ワークシート』には、自身のレッスン内容の振り返りと、グループの仲間のレッスン内容を一人ひとりまとめ、さらに仲間へ感想や励ましのメッセージを記入することとした。記入した『ワークシート』は、次回の対面授業までに担当教師が印刷して対面授業のレッスン室に全員分の『ワークシート』を置き、学生は待っている間にそれを読むことができる。『ワークシート』は、紙で配布せず、ICTを活用した。Web上の授業連絡の添付資料として配信し、学生はダウンロードし、記入後その授業のWeb上にアップロードすることになっている。つまり、授業中は、学生各自が印刷したものに「メモ」として記入し、授業後、デジタル化する作業を行い提出するという流れである。

3) 質問紙調査

全授業終了後、レッスンの評価について質問紙調査を実施した。質問紙調査の項目は以下の4項目である。

問1) 仲間の演奏を聴いた感想(四択とその理由)

問2) 仲間の存在が自分の演奏に与える影響(四択とその理由)

問3) 仲間のレッスンへのメッセージを記入する際に、工夫・努力したこと(自由記述・複数回答可)

問4) 仲間からのメッセージによる自分の学習変化(自由記述・複数回答可)

問5) この授業における自主練習への積極性について(四択)

回答方法は、Web と紙の選択制とした。この調査は、中部学院大学倫理委員会の許可を得て実施した(倫理申請番号 C20-0026)。

Ⅲ. 結果と考察

Ⅲ. -1 『ワークシート』の考案

授業での気づきや感想を記録することは学びの定着に有効とされている。その記録をさらに仲間に伝えることで、“学生同士の学び合い”が成立すると仮説を立て、『ワークシート』を考案した(資料1)。『ワークシート』には、演奏曲名の記入欄と、そのほかに3つの欄を設けた。1つには、「曲に対する先生の助言」として、受講生全員分のレッスンを聴きながら、先生からの助言をまとめて記録する。同じ課題曲でも、受講生によって解釈や演奏法は多様である。正解不正解ではなく、他者理解の機会とする意図をもって設定した。2つ目に、「学生へのメッセージ」として、聴講した学生のレッスンに対する感想や励ましを記入するメッセージ欄とした。この欄は、主として相手に自分の思いを伝えるよう、自由な記述とした。この2つの欄を仲間同士でお互いに読むことで、“学生同士の学び合い”の意識づけを試みた。最後に、「自分の反省と来週への抱負」の欄には、他の学生のレッスンを聴いた後に自分自身を振り返り、次回までの自身の課題を設定する。

音楽は表現の領域であり、人前での発表が前提である。つまり、“自己と他者”の存在を意識することは表現活動の重要な要素である。この『ワークシート』導入は、自分とは違う他者の良さを発見する他者理解と、相手に意図を伝えようとする自己表現力を高める指導法と位置付ける。新型コロナウイルス感染症終息後も、オンライン授業が教育形式の1つとなり、この形式ならではの指導法の重要性が増すであろう。

Zoom 画面での学生の学習の様子を報告する。多くの学生は自身のスマートフォンを使って Zoom に入っている。キーボードにスマートフォンの設置だけでも工夫が必要な上、『ワークシート』をメモするスペースを確保することは、さらなる工夫を要する。本来ならば机上で記入する姿が理想であるが、ピアノの蓋の上や、教科書を下敷きにして記入する様子が散見された。この点は、学生のために無理のない記入法を促す必要があった。最終提出のためには、パソコンやスマートフォンの Word で清書する。ピアノ技能は聴くだけでなく、その場の状況を見ていなければ理解できないことから、リアルタイムで word 画面にして文字を打つことは不可能である。その点では、授業中のメモを再度 word で清書するという振り返りは学びの機会とみることもできる。このように、自分の授業環境を創意工夫することも、『ワークシート』を活用した Zoom 授業ならではの指導法の狙いである。

Ⅲ. -2 『ワークシート』記入の改善指導

実際に提出された『ワークシート』には、学生によって内容や言葉の選択、メッセージ力などの差が見られた。『ワークシート』の効果を高めるため、学習の途中で今一度、記入する目的と記入内容について自覚を促す必要が生じた。そこで、学生全員に対し、良い例の『ワークシート』の紹介と、要改善の『ワークシート』への改善点を例示した資料(資料2)を作成し、『ワークシート』記入の指導を行った。改善の観点として、以下の5点を挙げ学生に周知した。

- ・「名前」の欄は、名前を正確に書くこと。愛称や呼び捨てにしない。
- ・「曲名」は正確に書く。
- ・「曲に対する先生の助言」は、単語の羅列ではなく、文として完結させる。具体的に、どこへどのような指導がされたかを書く。
- ・「学生へのメッセージ」には、自分が思ったことや相手に伝えたいことを、具体的な言葉で伝える。
- ・「自分の反省と来週への抱負」には、レッスンの成果と、来週までに達成したい具体的な目標を書く。さらに、その目標が達成できるための取り組みをイメージして書く。

良い例の『ワークシート』には文字数の多さが特徴的であった。『ワークシート』の記入が困難な学生は文字数が少なく、単語の羅列が多かった。そこで、気づきを文にすることの重要性を説明した。また、受け取った時の読みやすさも重要である。文の長さや改行での読みやすさの工夫が要求される。また、要改善の『ワークシート』には、どの観点が不足しているかを具体的に示した。註をつけながら具体例を示すことで、聴く観点が理解され、書かれた相手が嬉しく受け止められるよう配慮することにも気づいていった。また、教師の指導を注意深く聴講し、自分自身が内容を咀嚼して文としてまとめることで、

文章力も要求された。特に、4)「学生へのメッセージ」には、演奏や努力を称賛する気持ちが表現されるようになり、回数を重ねることで、メンバーとも気心を知る関係性ができ、一層具体的な声掛けの言葉が記入できるように変化していった。このように、『ワークシート』記入の改善指導により、内容の充実、仲間との意思疎通の促進が見られた。

Ⅲ. -3 質問紙調査

Ⅲ. -3-1 演奏による“学生同士の学び合い”について(問1・2)

全授業終了後、質問紙調査を実施した。84名中61名の回答を得て、回答率は72.6%であった。

問1)仲間の演奏を聴いた感想と、問2)仲間の存在が自分の演奏に与える影響の回答をまとめた(表1)。両質問とも、全員が「とても勉強になった」・「まあまあ勉強になった」と回答し、学習の手応えを持っていた。「あまり勉強にならなかった」・「勉強にならなかった」の回答はゼロであった。この結果から、仲間の演奏を主体的に聴き、「もし自分だったら」という感覚で受け止め、教師の助言も自分が受け止めることで、学びが深まったと認識されている。

表1 レッスンでの他者(仲間)の存在について n=61

	問1)	問2)
とても勉強になった	54名(88.5%)	47名(77.0%)
まあまあ勉強になった	7名(11.5%)	14名(23.0%)
あまり勉強にならなかった	0名(0.0%)	0名(0.0%)
勉強にならなかった	0名(0.0%)	0名(0.0%)

問1)に関して、『ワークシート』の記入が無ければこれほど集中して仲間のレッスンを聴講することは無いであろう。画面からではあるが、一人ひとりのレッスンを自分が受けているような感覚を持ち、自分も教師と同様に工夫点を発見しようとする姿勢が見られた。課題曲は全学生に共通している。「他の子が先生に言われたことを自分の時はどうだろう。生かせないかなど考えることができたから。」という自由記述からも、同じ課題曲の予習にもなっている。復習であれば、同じ曲でも表現の仕方の違いに気づくことができた。「自分と他者の違いを改めて分かった。」という感想も自由記述に多く見られた。「それぞれ良いところや直すところが違って、他の人の良いところ、直すところを見つけることは自分の聴く力もつけるし、良いところは自分にも取り込むことができるから。」や、「自分にはできていない部分や仲間の頑張りをみて自分ももっと頑張ろう、取り入れようと思えたから。」など、仲間から学ぶ言葉が多く見られた。このようにお互いに良さを見つけることは自分が頑張る原動力になっている。仲間の演奏や努力する姿を、ただ観ている場合と、記入する言葉をイメージして観ることは違うであろう。しかし、『ワークシート』記入の大変さについて述べる学生もあった。「書くことがいっぱい忙しい。」とあったことから、自分のレッスンを終了して書く場合と、まだレッスンを済んでいない学生が緊張感を持ったまま『ワークシート』に記入する場合とでは、負担感に差が出るようであった。今後指導側として、気づきを言葉にすることが苦手な学生への支援や、レッスン順の交代制などの工夫が必要であることが判明した。音楽は自分らしさを表現することも技能の1つである。仲間が聴く中での演奏は、自分らしさの表現のトレーニングの機会でもある。対面とは違い、すぐ近くに他者がいるわけではないが、空間を超えて仲間が聴いている前提で演奏することは、緊張の解消や自己表現について工夫を要する。これは不特定多数の前での演奏につながっていく。Zoom授業においても『ワークシート』が介することで“学生同士の学び合い”が機能していたと判断される。

問2)に関しては、問1)と立場が逆転し、演奏を聴かれる立場になった結果である。問1)の回答より、「とても勉強になった」の選択は10%低くなったが、「まあまあ勉強になった」が問1)の2倍となった。勉強にはなったけれど、「とても勉強になった」と言い切れない要因があるものと推察される。それを自由記述で見ると、「緊張」のキーワードが多く書かれていた。人前での発表は、表現において大切な要素であるが、対面授業が減少し、緊張に慣れていない様子が窺えた。「緊張」は岡田、杉山(2020)⁵⁾の研究で明らかになったオンライン授業の課題の「①人前での演奏に慣れる」を解消する機会になっていくよう、今後も見届けなければならない。苦手意識が強くと緊張は増加する。筆者のこれまでの経験から、緊張感の強さが原因で学習意欲が途切れる学生も存在した。その緊張感を貴重な経験と捉えられるよう教師の支援が必要となる。学生は、「先生と2人ではなく、みんなもいる事で、人前で弾くことに

少しずつ慣れてきたので良かったです。」とあるように、この経験を重ねることで、解決する方向に向かっている。また、「感想を書いてくれるので対面の時に読んで気をつけないといけないところを再確認することができる。」から、他者に聞かれていることや、記録として記述されることの自覚や、人前での演奏への慣れにつながる感想があった。

さらに、「先生に加え、仲間にも聴いてもらえるのは、緊張するのと同時に負けないように頑張ろうという向上心に繋がっていたから。」というモチベーションに関する記述も見られた。「毎回 Zoom の授業での評価をしっかりとみんな書いてくれて、自分の課題も見つけられすごく良い学びになりました。」との意見も見られ、仲間に聴かれていることは次の「問 4」のメッセージをもらうことにつながると認識しており、相手からの反応を期待する様子もあった。このように、オンライン授業であっても仲間とつながっている意識が構築されていくことが分かった。

Ⅲ. -4-2 言葉で伝え合う“学生同士の学び合い”について(問 3・4)

問 3)の「ワークシートにメッセージを記入する際の工夫・努力した点」について、各自由記述に含まれるキーワードを抽出した。そのキーワードに見る意味を「学びの姿勢について」、「コメントの観点について」、「伝えるための手段について」の 3 つのカテゴリに分けた。その結果を表 2 に示す。各カテゴリに含まれるキーワードは表 3 にまとめた。学びの姿勢のキーワードでは、「頑張ろう」との回答が最も多く、前向きな姿勢がうかがわれる。コメントの観点では、キーワードがほかのカテゴリより多く出現したことから、他者を理解しよう、自分とは違う要素も良い所としてみようとする姿勢が読み取れる。このように仲間の良さを見つけるには、「しっかり聴く」のキーワードが多かった。これまでのレッスンに無かった『ワークシート』へ記入することで、全員のレッスンをしっかり聴いて、主体的に考える機会となった。

また、教師の助言を記入するため、自分の考えの正誤を確認することもできている。しかし初期には、コメントを言語化することが困難な学生も見られた。Ⅲ. -3 のワークシート記入の改善指導を実施したことで、最終的に記入の充実が図られた。

表 2 ワークシートにメッセージを記入する際の工夫・努力した点の回答によるキーワード (n=61 複数回答)

カテゴリ	学びの姿勢	観点	手段	計
	13	53	31	97

表 3 ワークシートにメッセージを記入する際の工夫・努力した点の回答によるキーワード (n=61 複数回答)

カテゴリ	学びの姿勢	数	コメントの観点	数	伝えるための手段	数
キーワード	頑張ろう	5	良い所	21	しっかり聴く	13
	うれくなる良いメッセージ	2	助言	8	分かり易く	5
	力になりたい	2	たくさん、1つ	6	具体的に	4
	応援	1	前向き・ポジティブ	4	細かく	2
	自分に足りない	1	自分もそうになりたい	4	簡潔に	2
	読んでうれしい	1	努力	3	正確・的確に	2
	共感	1	ほめるところ	3	はっきり	1
			自分では気づけないこと	2	詳しく	1
			思いのまま	1	見つける	1
			前回との違い	1		
	計	13	計	53	計	31

問 4)「仲間からのメッセージによる自分の学習変化」について、表 4 にカテゴリ別のキーワード数と、表 5 に各カテゴリに出現したキーワードを示す。表 4 にあるように、この質問の回答にはキーワード数が多くあった。コメントをもらうことで、自分が多面的に変化し、学習意欲の高まりが読み取れる。表 5 では、学びの観点のキーワード数が多いことから、自分だけでは気づかない改善点が見つかり、それが今後の学ぶ姿勢につながっている。自分では気づかない自分の良い所が多いことから「気持ち」にある「うれしい、聴いてくれている」と実感している。このように、教師以外の他者の存在が自分にとつ

で学習の動機づけになる関係が築かれたことは、この取り組みの最も重要な成果である。また別の観点として、自分の演奏への気づきや客観視できたという意見もあり、メッセージにより自分の演奏を俯瞰できる機会となっていた。この自己評価と、表1の回答である問1)と問2)の「とても勉強になった」と「まあまあ勉強になった」の回答の100%が結びつくと考えられる。『ワークシート』の効果は、言葉で伝える点にあると言える。言葉で伝えることは学びが一層定着する効果がある。なぜなら、演奏を聴き合う場合は、瞬時にひらめく印象となるが、その印象を言語化し、時間に制約されることなく自分のペースで読むことができるからである。

表4 仲間からもらったメッセージを読んで、思いや学習への変化のキーワード (n=61 複数回答)

カテゴリ	学びの姿勢	観点	気持ち	今後の学び	計
数	35	37	22	29	123

表5 仲間からもらったメッセージを読んで、思いや学習への変化のキーワード (n=61 複数回答)

カテゴリ	学びの姿勢	数	観点	数	気持ち	数	今後の学び	数
キーワード	頑張ろう	20	自分では気づかない所	11	うれしい	10	助言を意識した	6
	モチベーション	5	良い所	8	聴いてくれている	3	改善する	3
	練習しよう	3	自分の課題 苦手を発見	6	相手の思いが伝わった	2	気を付けるところ	3
	その他のキーワード	7	アドバイス	3	その他のキーワード	7	次の課題点に分かる	2
			褒める	3			ためになった 参考になった	2
			上手・良かった	3			その他のキーワード	13
			前向きな言葉	2				
			先生の助言を伝えてくれる	1				
	計	35	計	37	計	22	計	29

Ⅲ. -4-3 『ワークシート』活用の全体的考察

質問紙調査の回答から、学生はICTを活用したZoom授業で『ワークシート』に記入するために、画面越しの授業の様子を集中して観察していることが分かった。得た情報や感想を記入する際には、読み手の存在を意識して言葉を選んでいった。学生は自ずと授業に対し積極的な学ぶ姿勢になっていた。この経過を経て書いた文であることから、相手が書いた文を読む際にも同じ努力をしていると感じ取っている。内容は、同一授業の『ワークシート』であっても、自分との見方の違いを知り、多様な捉え方があることを認めている。そして、学生自身が今後の課題に気づき、仲間とともに切磋琢磨する機会となった。また教師側にも期待される効果があった。『ワークシート』を読むことで、多くの情報が得られた。指導の在り方や助言の的確さなど更なる工夫や配慮の目安となり、指導法の充実が図られた。指導対象の本人以外の捉え方はより客観的視点であることや、今後同様の指導をする場合の指標とできるからである。教師は、相手に的確に伝わる言葉選びに責任をもち、グループでの協働学習の強化を担っている。それは、複数の教師で同じ質の授業を担保するための打ち合わせにおいて出された意見から窺うことができた。このように、『ワークシート』の活用は、“学生同士の学び合い”に留まらず、指導法の改善にも期待が持てる。

Ⅲ. -4-4 “学生同士の学び合い”に向けた自主的な練習について(問4)

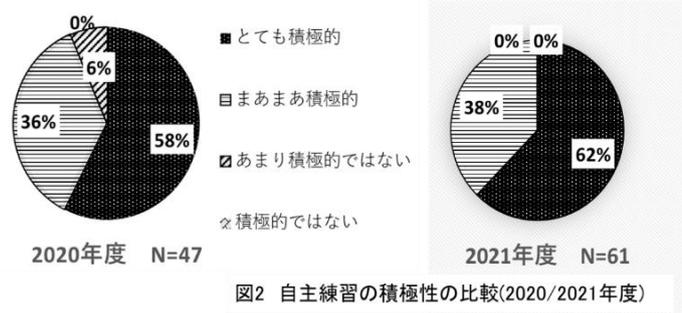
次に、自主練習も自主的な学びの姿勢の1つである。そこで、自主練習の積極性について調査した。

問5)この授業における自主練習への積極性について、4択の質問を行った結果、表6となった。表5にみられる「相手に思いが伝わった」、「聴いてくれている」など、教師以外の他者の評価をもらうために、積極的に練習をする姿勢が表れている。

表6 この授業において、自主練習は積極的だったか(人) n=61

	人数
とても積極的	38人 (62.3%)
まあまあ積極的	23人 (37.7%)
あまり積極的ではない	0人 (0.0%)
消極的	0人 (0.0%)

著者らは、2020年度の対面とZoom形式の同じ授業で、同様の調査を行っている(岡田・杉山,2021)3)。そこで、2020年度の質問紙調査の回答と2021年度の回答を比較し、図2に示す。回答者は違うが条件が同じことから、比較対象可能と判断した。しかし、授業の受講生はほぼ同数であったが、回答数は47名と61名の違いがあった。それは、2020年度ではまだWeb上での回答法に慣れていないことから、回収率が低くなっていた。図2



2では、2020年度、2021年度両方とも、「積極的ではない」の回答はゼロであった。両年(半期)とも、Zoomによる授業が行われていたため、自分の演奏が仲間全員に聴かれていることは分かっていた。しかし『ワークシート』の記入が加わったことで「とても積極的」が4%微増し、「あまり積極的ではない」はゼロになったとも推論できる。仲間の存在は自主練習への意識にも変化が表れ、授業に向けた予習復習の積極性に表れていると言えよう。

IV. まとめ

オンライン授業では、仲間意識が希薄との課題も発生している。しかし、指導法をさらに工夫することで、“学生同士の学び合い”が成立した。教師对学生の1対1の授業であっても、その様子を仲間が共有しメッセージを書く行為は、仲間の絆を深め意欲を喚起していた。自分や仲間の学習の客観視や、同じ曲でも表現が多様であることで、自分の音楽技能の幅も広がる。このことから、図3の“学び合い”のフロー図がイメージできる。この循環を繰り返すことで、“学生同士の学び合い”が深まっていくことが分かった。

オンライン授業のメリットとして、手元や表情などアップに映すことができるため、画面から良く見える。今回の調査の範囲外のことではあるが、期末試験では、30名ずつのクラスでの対面でのピアノ演奏を行った。自分の演奏での緊張感の克服も大変であるが、仲間の演奏を真剣に聴き、応援の気配も多く感じられた。このように仲間づくりは、学習を支え合っていると見られた。

アフターコロナでは、対面とオンラインのそれぞれの良さを生かした指導法がさらに進み、その指導法にICTが一役を担うであろう。教師も学生も創意工夫をしてICTの進化を享受する姿勢が大切である。『ワークシート』を対面時に閲覧したが、今後はオンライン上でスピード感を持ってフィードバックし、学生への教育効果を高められるよう努めたい。また、学生の国語力も向上させる機会と捉え、他者に対する配慮ある言葉の使い方などの指導をする計画である。人とコミュニケーションを大切にする保育者養成校の学生に対し、教師は、技術指導だけでなく求められる人間性を一緒に育むことを目指していきたい。

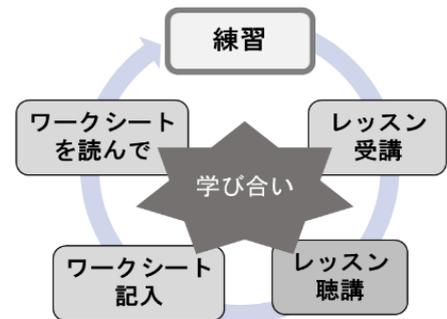


図3 “学生同士の学び合い”のフロー図

文献

- 1) 田中功一、小倉隆一郎、鈴木泰山、辻靖彦「ピアノ学習プロセスの表出かたと変容」電子キーボード音楽研究,pp4-16,2017.
- 2) 小澤俊太郎「ICT活用によるピアノレッスンが抱える課題の解決」埼玉純真短期大学研究論文集第12号,pp7-14,2019.
- 3) 松井典子「ICTを活用したピアノ実技指導の試み」志賀短期大学研究紀要第46号,pp213-221,2021.
- 4) 岡田泰子、杉山祐子、「実技習得のための遠隔授業の可能性について」中部学院大学短期大学部第2回FD研修報告,2020.
- 5) 岡田泰子、杉山祐子、「オンライン(Zoom)を用いたピアノレッスンにおける課題と改善」全国大学音楽教育学会第36回全国大会発表,pp24-25,2021.

